

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	世紀末ウィーンの「妊娠小説」
Author(s)	武田, 智孝
Citation	広島ドイツ文学, 31 : 15 - 30
Issue Date	2019-02-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047077">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047077</a>
Right	Copyright (c) by Author
Relation	



## 世紀末ウィーンの「妊娠小説」

武田 智孝

### 「妊娠小説」

シュニッツラーの『自由への道』 (*Der Weg ins Freie*) は、ドイツ人男女の「恋愛小説」と「ユダヤ人問題」との「二重構成」になっていて、両者が必ずしも十分かみ合っていない、というのがゲオルク・ブランデス以来の通説である。<sup>1</sup>しかし「恋愛小説」ではなく「妊娠小説」と捉えると、少し違った景色が見えてくるのではあるまいか。

「妊娠小説」とは「望まない妊娠」を題材とする小説のことで、1994年齋藤美奈子によって提唱されたコンセプトである。<sup>2</sup>森鷗外『舞姫』と島崎藤村『新生』を元祖とし、多くは戦後、昭和30年以降に発表された。家族計画、産児制限といった必要にも迫られて昭和27年に「優生保護法」<sup>3</sup>の改定が行われ、妊娠中絶が事実上解禁となり、「墮胎罪」は有名無実化した。「妊娠小説」の隆盛はその結果である。したがって元祖二作品を除く戦後の「妊娠小説」のほとんどが「妊娠中絶小説」<sup>4</sup>である。責任を取りたくない男、出産を望まない男<sup>お</sup>に圧される形で、産みたい女は中絶を余儀なくされ、それを契機に二人の仲は冷えて、関係は終りを迎える。中絶の失敗が女の命を奪う場合もある。女から男への「受胎告知」から二人の戸惑い、躊躇い<sup>ためら</sup>、葛藤を経て中絶、そして別れへと至るまでの経緯が描かれる。

齋藤のターゲットは日本文学に絞られているが、「望まない妊娠」は国境を越えて格好の文学的素材であるから当然ドイツ文学にも「妊娠小説」はある。真っ先に思い浮かぶのはクライスト『O...侯爵夫人』。思い当たるフシなどないのに妊娠に気付いた貴族の未亡人が不品行を疑われ、非難され、思い余ってついに、自分のお胎の子の父親は名乗り出てほしいという前代未聞の新聞広告を出すというのが始まりの、まさにNovelle (新奇・耳よりな話) の名に恥じない小説である。「無原罪の御宿り」のパロディーでもある。<sup>5</sup>

<sup>1</sup> Fliedl, Konstanze: *Arthur Schnitzler*. Stuttgart 2005, S. 178.

西村雅樹: 世紀末ウィーンの知の光景, 鳥影社 2017年 222頁。

<sup>2</sup> 齋藤美奈子: 妊娠小説, 筑摩書房 1994年。

<sup>3</sup> 齋藤の著書が出てから二年後の1996年に改定され、「母体保護法」が成立した。

<sup>4</sup> 「妊娠中絶小説」という表現を齋藤は使っていない。

<sup>5</sup> 「処女」マリアの受胎から「神の子」イエスの誕生に至る神話も「妊娠小説」の一種である。

夫婦の間にも「望まない妊娠」は起こりうる。ゲーテの『親和力』は、もはや愛の冷めてしまった夫婦に起きた妊娠と出産、そして誕生した奇妙な赤ん坊が当の夫婦はもとより周囲にも大きな波紋を広げるという異色の「妊娠小説」と言えよう。

いずれも「望まない妊娠」がなければ始まらないお話であることは間違いない。

中絶をあつかった作品はキリスト教国ドイツでは珍しいが、ヴェーデキント『春の目覚め』が稀な例である。ふとした過ちから十代半ばの娘が妊娠し、スキャンダルを怖れた母親が民間医療に頼って怪しげな墮胎薬を飲ませたために娘は死ぬ。「生の呼び声」<sup>6</sup>の高まりによって従来の道徳観が揺らぐ中、性のタブー視を批判し青少年への性教育の必要性を訴えるという啓蒙的な意図をも強く感じさせる問題作である。

日本の「妊娠中絶小説」に当たるのはドイツでは「嬰兒殺し文学」で、有名な『ファウスト』第一部のグレートヘン悲劇を始め枚挙にいとまがない。いずれも時代が古く、主に18世紀後半から19世紀前半までである。かつて未婚の娘たちにとってJungfräulichkeit（処女性）の喪失は社会的な死を意味し、市民社会から追放されて賤業に身を墮<sup>おと</sup>すしかなかった。未婚のまま子を産むことは処女性喪失の明白な証拠であるから、発覚を恐れて密かに出産し、その子を始末しようとしたのである。子殺し女は斬首された。

世紀末ウィーンの作家シュニツラーにも嬰兒殺し文学の変種とも言うべき作品が二つある。<sup>7</sup> 未婚のまま妊娠した女が出産直後に子供を殺そうとして果たさず、やがて長じた息子はグレート母親にたかり、拒んだ母を殺す。女は自分がかつて犯そうとした罪の報い、償いとしてこれを受け入れ、息子を厳罰に処さないようお願いして死ぬ。この時代には、上流社会を除くと、娘たちを縛っていたJungfräulichkeit保持の掟は緩み、特に下層社会からはいわゆる süßes Mädchen（可愛い下町娘）が登場して、経済的に恵まれた貴紳や貴公子らを相手に援助交際にも似た風潮が生まれた。しかし妊娠に気付く頃に男が逃げたりすると、女一人で未婚のまま子供を産み育てるには社会的、経済的に非常な困難を伴うのである。

『自由への道』は「望まない妊娠」から出産に至るまでを扱う、いわばフルコース<sup>8</sup>の「妊娠小説」である。これに着目することによって見方がどう変わるか。

恋愛や性愛は二人だけの秘め事にすぎないが、妊娠した途端にバラ色の世界は一変する。新しい生命の宿りという厳粛な事実、結婚・育児という社会的責任に直面させられる。日本の小説では、妊娠という自然の猛威を、あるいは神の恵みを人工的に闇に葬り去ることで責任を放棄し、社会との関わりを回避する。「中絶小説」は医者など医療関係者が顔を出す程

<sup>6</sup>シュニツラーの *Der Ruf des Lebens*.

<sup>7</sup>『息子 (*Der Sohn*)』と『テレーゼ [邦訳: 女の一生] (*Therese*)』。

<sup>8</sup>斎藤は「出会い→初性交→妊娠=受胎告知→中絶→別れ」を「フル装備」の「妊娠小説」と呼んでいる。同上:125-6頁。この小説の場合は中絶の代わりに出産=死産が置かれている。

度で終わる。しかし妊娠が出産に至るシュニッツラーの小説では、当事者男女それぞれの戸惑い、悩み、葛藤にとどまらず、医師以外にも双方の家族、特に女の側の両親の思い、知人や友人たちの態度も視野に入って来る。当時の社会が映し出される。

しかも医師や付添人はユダヤ人である。彼らには家族がおり、ユダヤ人社会の輪が取り巻く。特にそのジュニア世代が折からの反ユダヤ主義に対抗して次々に事件を起こし、話題を提供し、非ユダヤ人である恋人たちもその議論に巻き込まれる。こうしてこの「妊娠出産小説」にはユダヤ人問題が絡みつき、パッチーワーク状に張り合わされ、あるいはモザイク状に組み込まれる。「妊娠小説」と捉えることによって、少なくとも物語構造的には、「恋愛小説とユダヤ人問題の二重構成」という見方は必ずしも当てはまらなくなる。

そのうえここでは男が貴族（男爵）、女が小市民（中流のやや下層）<sup>9</sup>の娘であることによって、身分差問題が関わって来る。ハプスブルク帝国では世紀末に至ってもまだ身分制が堅持されていて、身分の違いが持つ隠然たる影響力を視野に入れることなく、ゲオルク/アンナの関係も二人の思いも、またそれぞれの家族の心理も、周囲の人々の反応も理解することは困難である。もしブランデスが推奨したように、アンナがユダヤ人に設定されていたとしたら、ウィーン世紀末という時節がら民族間の軋轢が絡んで来て問題が複雑化し、貴族対小市民という身分違いのテーマがボヤけたものになっただろう。それに、主役の恋人たちが非ユダヤ人であることによって、ユダヤ人問題へのある程度距離を置いた視点も確保できる。この小説は二重構造、不統一といった批判とは裏腹に、よく考え抜かれたしたたかな計算が背後に働いていると見た方が正しいのではあるまいか。

### 「受胎告知シーン」

斎藤は、女が男に妊娠を告げる「受胎告知シーン」こそ「妊娠小説」のかなめであり、アイデンティティーであって、その有無こそが「杳としてつかみどころのない恋愛小説や青春小説」から「妊娠小説」を分かつポイントだと言っている。<sup>10</sup>

『自由への道』でこの場面はどう描かれているか。

その時突然アンナの声が響いた。「大事なことなんだけど」と彼女はゆっくりと言った、「シュタウバー先生に診てもらおうしかなさそうなの。」

---

<sup>9</sup>シヨースキーは a lower-middle-class girl と呼んでいる。Schorske, Carl E.: *Fin-De-Siècle Vienna: Politics and Culture*. New York 1981, P. 14.

<sup>10</sup> 斎藤美奈子：同上，102 頁。

不意を突かれてゲオルクは手に持っていたマッチの火を吹き消した。アンナが何のことも言っているのかすぐに分かった。(中略)「でもまだ確かってわけじゃないんだろうか (...) それに...たとえそうだとしても--」と彼は無理に快活を装って付け加えた。<sup>11</sup>

アンナが妊娠を告げて立ち去った後の彼の心境は、「きっとこれは彼女の思い違いだ、彼女は堅実な市民的枠組みの中で生を全うし (im Bürgerlichen zu enden) , 愛人の子を身ごもるなどという星の下にはない。自分だってこんな重大な責任 (Verpflichtungen ernster Art) を背負い込んだり、今ごろ早々と未来永劫にわたって一人の女に縛り付けられたりする定めにはないんだ、こんなに若くして父親になるなんて、父親に! 父親という言葉は重苦しく、ほとんど陰鬱に彼の心に沈み込んだ。」[傍点引用者] (S.738) というものだ。更に後には、「いつかある瞬間に受精させたのだ、望みもせず、父親になるかもしれないなどはつゆ思わず。」[傍点引用者] (S.872) と思う場面もある。

身勝手としか言いようがないが、ゲオルクにとってはまさしく「望まない妊娠」。起こりうる結果なのに、虚を突かれて腰が定まらないのも、責任を背負い込みたくない、父親になりたくないと思くのも日本の男たちとさして変わりはない。ただそこに中絶という選択肢はない、それが決定的な違いである。

再び「受胎告知シーン」に戻ると、あの後「じゃあ赦して下さるのね? (Also du würdest mir verzeihen?)<sup>12</sup>」(S.736) とアンナが言って微笑んだ時、ゲオルクは彼女を抱きしめ、いっぺんに気が楽になり (ganz aufgeräumt) , この女が相手なら決して厄介なことにはならずに済む (niemals ein ernstliches Leid kommen) などとプレイボーイらしいことを考え、二月末か三月になったら (今はクリスマス前の四旬節) 人目を避けてウィーンを離れ、イタリアに旅行しようという話になって、二人はこれまでになく幸せな気分になる。(S.736)

数日後ゲオルクは兄に恋人の妊娠を報告する。その際の対話を要約すると:

兄: お前はその関係を正式なものにしよう (legitimieren) という気はないのかね。

弟: 当面ないよ (Vorläufig nein.)。将来何が起きるか分からないが。

兄: その娘はお前が結婚する気のないことを知っているのか。

弟: まさか僕が結婚の約束をしたなんて思っていないだろう。

兄: 思っていないよ。しかし見捨てることもしないよな。

<sup>11</sup> Schnitzler, Arthur: *Der Weg ins Freie*. In: *Gesammelte Werke Die Erzählenden Schriften* Frankfurt a. M. 1981 S.735f. 以後、ここからの引用は (S. 数字) で引用直後に示す。

<sup>12</sup>普通は *jm. et. verzeihen* で、ここには4格が欠けているが、妊娠以外には考えられない。

弟: そんな不誠実なこと (so eine Unaufrichtigkeit) は出来ないよ。こういう場合に起こり  
そんなことが起きてしまったまでだ。まったく何の計画もなくこんなことになってしま  
った。[傍点引用者] (S.779f.)

兄は弟の計画性のなさを非難するものの、妊娠した恋人を見捨てたりはしないが、当面結  
婚する気もない、という弟の返事に安堵した様子である。兄はどちらかと言うと古い世代に  
近くて、身分制秩序を重んじる方の立場なのだ。やがてこの兄は外交官になるが、仲間とア  
フリカへ猛獣狩りに出かけるような、いかにも当時の貴族らしい青年である。

### 身分の壁

『輪舞』その他の作品を俟つまでもなく、性愛はアナーキーな力で身分の垣根など問題に  
しない。だが結婚となると社会的力学が働く。性愛が無視した身分制秩序が結婚の場合には  
壁となって立ち現れる。身分の違いが貧富の差を意味するだけでないことは、テキストに散  
りばめられた幾つもの場面から透けて見える。いくら結婚する相手はアンナだといっても、  
親族の教養や洗練の度合い、その住宅・生活環境、考え方や生き方にも、立ち居振る舞いか  
ら生活全般にわたって身に染みついてしまったものがあって、歴然とした違いは如何ともし  
難い。食うために働く必要のない身分と額に汗して生計を維持しなければならない市民との  
間の差はヴィルヘルム・マイスター以来変わっていない。<sup>13</sup>

身分差ということをも最も強く感じさせるのは、アンナからの「受胎告知」を受けて、ゲオ  
ルクがアンナの家を訪ね、その母親にこれまでのいきさつと今後の予定を説明する箇所であ  
る。人目を避けて二人でイタリアに旅行し、出産には郊外にヴィラを借りる、生まれて来た  
子供はウィーン近郊に里子に出す、出来る限りの支援はすると言うが、結婚ということは一  
言も口にしない。「娘を誘惑した貴族の青年 (dem vornehmen Verführer) を前に文句ひとつ言  
えない小市民のあわれな母親 (eine arme Mutter, in kleinbürgerlichen Verhältnissen)」は「聞かさ  
れたことの中身以上に、そういう話をなすすべもなく (wehrlos, machtlos) ただ拝聴するほかな  
い身の上に胸塞がれる思いがした。」(S.765) ゲオルクはさすがに憐れを催し、椅子を近づ  
けて母親の手を取り、しばらく包み込むように握りしめていた。アンナも同席していたが終  
始ほとんど口を挟まず、ゲオルクが帰りかけた時立ち上がって、初めて母親の前で彼と唇を

---

<sup>13</sup>乗馬やフェンシングを始め諸般の嗜み、マナーから身のこなしに至るまで貴族は恵まれた境  
遇の中で身につけるが、生活に追われる市民に多面的人間形成の機会はない。俳優は舞台の  
上で王侯を演じる必要から貴族と同等の教養、技能、優雅さ…を、たとえ仮象にすぎないに  
しても身につけることになる。だから自分は演劇の道を選ぶのだ、とヴィルヘルムは言う  
(*Wilhelm Meisters Lehrjahre*, V. Buch, Kapitel 3)。

合わせて見せる。「あたかも婚約の成立を祝うかのようだった。」(S.765)と語り手は解説するが、母親の気持ちを宥めるための彼女なりの演技だったのだろう。

身分制秩序の非情さは、その数日後にゲオルクを訪ねて来た父親ロースナー氏の言動にも覗える。妻から話を聞いて「愕然とし」「体が震えた」と言い「何度も泣きそうになり」「声を震わせ」ながらも、相手を「男爵様(Herr Baron)」(S.766f.)と呼ぶことを彼はやめない。父親が帰った後、ゲオルクはほとんど自己嫌悪に近い後味の悪さを感じながらも、残るは弟だけが、「汚された家の名誉を雪ぐために闘う(Rächer der Hausehre)」などぬかしたなら、存分に「身の程を思い知らせてやるぞ(in seine Schranken verwies)」(S.767)と考える。

「名誉(Ehre)」は身分制社会の基礎をなす理念・制度で、貴族など上流社会の特権であり、小市民には無縁なのだ。そういう階層の子女がたとえJungfräulichkeitを失っても、妊娠させられても、本人はもとより家族にも、失うべき名誉(市民権・社会的生命)などはなく、相手の貴族に対して恨み言一つ口に出せない。これは、アンナが属する中層の家庭であっても、「可愛い町娘(das süße Mädel)」の出身母体である下層市民の場合と変わらないのである。それがこの時代の決まりごとなのだ。ゲオルクが特に差別意識が強いわけでもないし、ロースナー夫妻が特に卑屈なわけでもない。

ゲオルクをほっとさせた「じゃあ赦して下さいのね(Also du würdest mir verzeihen?)」というアンナのいじらしいとしか言いようのない言葉も、「男爵様」に対する彼女の母親や父親の態度と同様、身分差感情が習い性となって身に沁みついてしまっているところから来ている、そう考えるのでなければ理解できない。

シュニッツラーの『自由への道』が発表されたのは1908年、扱われているのは1904年秋から1905年秋に至る約一年間とされる。<sup>14</sup> ほんの110年あまり昔の話にすぎないが、かの時代が現代とどれほど懸け離れていたか、想像を絶するのである。

### 平手打ち(Ohrfeige)の悲喜劇

現代との隔たりを示す格好のエピソードが小説第五章に書き込まれている。ユダヤ人大富豪(軍需産業)エーレンベルク家の父子対立から起きる事件だ。父親は伝統を重んじるユダヤ人、息子オスカーは極端な同化主義者で同族嫌悪の反ユダヤ主義者、親子の間には普段から軋轢が絶えない。ミヒャエル教会前広場(宮殿 Hofburg と聖ミヒャエル教会が向きあう)で、そのカトリック教会から出て来た貴族たちに向かって、偶然そこに居合せたオスカーが帽子をちょっと持ち上げて挨拶した。当時この帽子を持ち上げる挨拶の仕方がエレガントな身振りとされていて、相手の宗教に敬意を表する意図などオスカーにはなく、ただのスノビズム

<sup>14</sup> Jürgensen, Christoph/Lukas, Wolfgang: *Schnitzler Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart-Weimar 2014, S. 151; Fliedl, Konstanze: ebd. S. 182.

の現われだったのだが、たまたま運悪く通りかかった父親はこれを目にして宗教的意味に解釈し、息子に平手打ちを喰らわせた。恥知らずめ、ユダヤの魂を忘れたか、というわけだ。この広場は聖シュテファン大聖堂前と並んでウィーンの中心地だから、大勢がこの光景を目撃することとなった。息子は即日ウィーンを離れ、誰も知る者のいない遠い土地に逃れ、しばらく後にピストル自決する。だが弾が逸れて一命はとりとめるが、片方の目を失明する。

(S.808)

いくら公衆の面前とはいえ、父親が息子に頬打ちを喰らわせたという程度の他愛無い親子喧嘩である。それがなぜ息子の自決などという大それた結末に至るのか。

第一に当時（現代西欧でも多少は）平手打ち（Ohrfeige）が暴力というより象徴的侮辱行為（Beleidigung）であり、数ある侮辱行為の中でも最たるものと見なされていた<sup>15</sup>からである。第二に、侮辱（Beleidigung=相手の名誉を失わせる行為）に対しては貴紳たるもの名誉回復のために何らかの措置（Satisfaktion）を取らねばならない。これが当時の上流社会を支配していた「名誉の掟（Ehrenkodex）」である。名誉（Ehre）を失えば帰属する上流社会から追放される。社会的な死である。第三に息子オスカーは予備役の将校だった。軍人（少尉以上の将校）にとって名誉規定の遵守は至上命令である。予備役といえども将校であるいじょう、オスカーは名誉の掟に一層強く縛られ、平手打ちの侮辱に対して名誉回復の措置を取らねばならない。第四に彼らがユダヤ人親子であったこと。高まりつつあった反ユダヤ主義を標榜する新聞がいつせいにこの「スキャンダル」を書きたてて世論を煽り、その日のうちに平手打ち事件はウィーン中の知るところとなってしまった。（S.808）

予備役将校オスカーはこの侮辱行為に対して名誉回復のための何らかの行動を起こすべく追いつめられた。名誉規定によれば選択肢は二つ。①侮辱した相手との決闘、もしくは②自決。名誉回復の手段はこの二つしかない。だが名誉を諦め、上流社会（この場合は将校サークル）からの追放を甘受するのであれば、③誰も知る者のいない遠隔地への逃避という手もある。名誉回復の手段としていちばん普通に行われたのは決闘だったが、不運にも相手は父親である。父親に向かって決闘というわけには行かない。残された道は②か③しかない。実際オスカーは先ず名誉を捨てる覚悟で③の逃亡を選ぶが、しばらく後に思い直し、名誉を守るべく意を決して②自決の道を選んだというしだいである。

オスカーは失敗に終わった自決によって右目を失ったものの、軍人としての名誉を守ったとして「少尉の地位を失わずにすんだ（die Leutnantscharge gerettet）。」（S.825）彼は「右目に黒い眼帯をして」（S.826），オーストリア軍の実状に対して批判的なパンフレットを出した

---

<sup>15</sup> Speitkamp, Winfried: *Ohrfeige, Duell und Ehrenmord*. Stuttgart 2010, S. 25ff.



かど  
廉で宮廷を追われたグェスタッラ公子 (Prinz von Guastalla) とともにヨーロッパを離れてインド、セイロンに向かったという後日譚が報告されている。(S.922)

世紀末ウィーンとはこういう社会・時代だった。殊に、社会制度のあまりにも異なる日本の研究者はそのことを心に銘記すべきであろう。このエピソードはユダヤ人社会の世代間葛藤をよく表しているだけではない。名誉と名誉規定 (Ehrenkodex) という身分制社会の不文律がその当時まだいかに大きな強制力を持っていたかをも示している。オスカーは帽子をちょっと持ち上げて挨拶する貴公子たちの流行の仕草をまねて得意然とし、父親世代の蒙昧ぶりを批判するモダンな若者のつもりだったが、旧態依然とした名誉の規則に縛られ、それに従って身を処すほかない羽目に追い込まれたのである。

この捻じれは、決闘事件を二度も起こすレオ・ゴロウスキーにも見て取れる。最初は姉のテレゼに馴れ馴れしく声をかけて来た反ユダヤ主義の伯爵相手にサーベルで。二度目は軍の上官。レオに対して反ユダヤ的な言動を弄した中尉が相手である。予備役の訓練期間が終わった直後に兵舎の前で待ち受け、相手がサーベルの柄に手をかけたところ、その手を押さえ込み、もう片方の手の拳こぶしを相手の額ひたいに突きつけて決闘を挑む。「昨日までは貴殿の方が私より上だった。今日は同等だ。しかし明日の今頃は我々のどちらかがより上になる。」

(S.925) 二十歩の距離を置いて三度引き金を引き、決着がつかない時はサーベルでどちらかが戦闘不能に陥るまで闘うという、仕来たり通りの形式を選ぶ。二発目で中尉は斃れ、レオはしばらく未決囚として収監されたのち恩赦を受けて釈放される。

反ユダヤ主義に対して敏感というよりほとんど過敏なユダヤ人青年が自らの人権を主張するのに、軍隊の伝統的名誉規定のつとに則って決闘し、恩赦されるのである。姉のテレゼは弟の釈放に「理論上反対」だと言い、「こんな反吐へどの出そうな決闘茶番劇 (diese ekelhafte Duellkomödie)」(S.936) じゃなく、普通に一人一人を殺していたのであれば5年や10年は喰らい込んでいたはず、決闘という国家が容認する軍隊式のやり方に卑屈にも身を屈したおかげで恩赦されたわけで、そのことが社会主義者テレゼには許し難いのである。

しかしその彼女もまた、かつて「不敬罪 (Majestätsbeleidigung)」(S.695) の廉で収監されたことがあって、釈放されたのはユダヤ人大実業家エーレンベルクの金の力によるらしいと噂されている。新しい価値を主張する若い世代が、旧時代の遺物である名誉規定とか恩赦とか、シニア世代の金銭力に支配される図式。若い世代は父親世代を否定しながら父親たちの遺した旧い制度によって縛られ操られるという構図である。

「恋愛小説」と「ユダヤ人問題」には「捨て鉢の非道さ (verzweifelte Inhumanität)」<sup>16</sup>とか、「反自由主義的な大衆政治の台頭」<sup>17</sup>の破壊的影響とか「アイデンティティの危機」<sup>18</sup>とか

<sup>16</sup> Fliedl, Konstanze, ebd., S. 179.

<sup>17</sup> Schorske, Carl E., ebd., S. 14.

が共通のテーマとしてあるだけではない。古いものの考え方や窮屈な道徳律からは既に解放されたジュニア世代も、他方では身分的特権としての名誉、名誉回復のための決闘や自決といった身分制と結びついた旧来の仕来たりや観念にはまだ支配されたままなのである。そのため彼らの行動は矛盾に満ちたものとなる。この昏迷と閉塞状況こそが「妊娠小説」系と「ユダヤ人問題」系とに共通する重要な特徴の一つなのではあるまいか。

### 「私はそんな女じゃありません (für solche Sachen bin ich nicht.)」

ゲオルクに結婚を躊躇<sup>ためら</sup>わせる「何か」は身分制秩序と深く関連しているが、ここで当時の身分制社会におけるアンナの、上層でもない下層でもない、中間的な微妙な立ち位置について述べておきたい。

先ず、アンナが上流社会の令嬢であれば、未婚のまま妊娠などということはあり得ない。万一そういう事態になったとしたら相手の男は結婚という形で責任を取るほかない。結婚しなければ娘本人のみならず家名（一族の名誉）に傷がつくので、名誉回復のために女の親族の男たちの誰かが決闘を挑み、ゲオルクは受けて立たねばならない。富裕層とか貴族の令嬢たちはまだ *Jungfräulichkeit* 保持の縛りの中にあつた。アンナは上流家庭の令嬢ではない。だからこんな「妊娠小説」が成り立つのである。大富豪の娘エルゼ・エーレンベルクが相手ならこんな話はあるまい。ゲオルクがエルゼを…双方憎からず思っているにもかかわらず…避けた理由の一つはそこにあるのではないだろうか。しかもエルゼはユダヤ人である。話が纏ればユダヤ人差別に対してことのほか敏感な男たちが黙ってはいない。更に弟のオスカーは先ほど述べた通り殊更に名誉規定に忠実であることを要求される予備役の将校である。ただで済むわけではない。これはそういう時代のお話なのである。

しかしアンナがいわゆる「可愛い下町娘 (das süße Mädel)」ではないということは強調しておかねばならない。もし下層出身のそういう娘なら妊娠したとしても慰謝料程度で済む。ゲオルクはすべてが終わったのち、ずっと妊婦に付き添ってくれたゴロウスキー夫人に、アンナに渡してくれるよう紙幣の入った封筒を託すが、アンナの心情を<sup>おもんばか</sup>慮った夫人は封筒をそのままゲオルクに返す。「これを渡したらあの娘はひどく感情を害したことでしょう」

(S.937) もしアンナが「可愛い町娘」なら、人目を避けて共にイタリア旅行に出掛けるとか、郊外にお産のためのヴィラを借りるとか、立派な医師（ドクトル・シュタウバー以外に大学のプロフェッサーまでも）に立ち会ってもらうとか、付き添い婦を付けるとかまでする必要はない。<sup>19</sup>

---

<sup>18</sup> Janz/Laermann. ebd., S. 170ff.

<sup>19</sup> シュニツラーの戯曲『遺言(Das Vermächtnis)』に、貴公子との間に私生児をもうけた「可愛い町娘」トーニの悲惨な運命が描かれている。拙論『「可愛い町娘(das süße Mädel)」の自殺、そして復讐』広島ドイツ文学 25号 (2011) , 33-48頁。

彼女がその人柄や気概の点でもその手の女の子でないことは次のような箇所にもさりげなく示されている。「彼（ゲオルク）はかつて、これから町へ出て、どこかレストランの個室で（in irgend einem abgeschiedenen Gasthauszimmer）一緒に夕食でもと誘ったことがあったが、（アンナは）時折見せるキツとした厳しい口調で「私はそんな女じゃありません（für solche Sachen bin ich nicht.）」と答えたのだった。」（S.706）「どこかレストランの個室」は名高い戯曲『輪舞（Reigen）』でchambre séparée（Cabinet particulier）と言われているのと同じものである。『輪舞』には計7回これが出て来るが、いずれもdas süße Mädelがお相手の場面（VI-VII）。レストランの名はRiedhof、「男女の密会（intime Zusammenkünfte）の場として」<sup>20</sup>利用された。ゲオルクはほとんど隠語と化したフランス語を使わずに、あえて回りくどいドイツ語で言ったのだったが、アンナは意図を察して、自分をそういう類<sup>たく</sup>いの女の子と一緒にしないでくれと言いついたわけである。

彼女は中流家庭の子供たち相手にピアノを教え、歌手になるには声足りないものの声楽の嗜みもあり、躰もよく、しっかりした娘である。主治医のドクトル・シュタウバーは「きちんとした家庭の娘（ein junges Mädel aus guter Familie）」（S.774）と言っている。そういう堅気の間市民層の娘が未婚のまま男と関係を結び妊娠したのである。シュニツラーの小説にこの階層の娘がこんな問題を起こす話は見当たらない。<sup>21</sup>これは当時としてはまだ特異なケースだった。彼女を診たシュタウバー医師は「ちょっとショックでした」（S.774）とゲオルクに述懐する。彼はゲオルクの亡くなった父とも懇意だった人で、お父上が生きておられたらきっと同じことをお感じになられたはずと言っている。この世代にとって、こんなことはあり得ないし、あつてはならないことなのだ。彼はゲオルクをあからさまに誘惑者として非難はしないが、アンナのことを犠牲者（Opfer）と呼んでいる。

しかし時世は変わった。アンナが心を決める時の様子は次のように書かれている。「身を任せてもいいと思う男がこの世にいると心から思ったのは生まれて初めてだった。自分を待ち受ける喜びも悲しみもすべて自分で引き受けるのだと心に誓った（daß es einen Menschen auf der Welt gab, der aus ihr machen konnte, was ihm beliebte; mit dem festen Entschluß, alle Seligkeit und alles Leid hinzunehmen, das ihr bevorstehen mochte）。やすらぎに満ちた幸せへの静かな期待はこれまで抱いたどんな希望よりも素晴らしかった。」（S.711）

本来は「堅実な市民的枠組みの中で生を全うし、愛人の子を身ごもったりする」はずのない（S.738）中流家庭の娘がこういう覚悟を固めて、それを実行するのである。ほんの一世代

---

<sup>20</sup>Koebner, Thomas: *Erläuterungen und Dokumente. Arthur Schnitzler. Reigen.* 1997 Stuttgart. S. 7.

平田達治: 輪舞の都ウィーン, 人文書院 1996, 216 頁。

<sup>21</sup>*Fräulein Else* の主人公エルゼはアンナより上層であるがゆえに抑圧が強く働き過ぎるので、その結果、心理的破綻に至る。

の間に「生の呼び声」は一段と勢いを増し、道徳律の縛りが緩んで、婚前交渉の流れは下層のみならず中流層の子女にまでも及んだ、そして妊娠に至った。これは一世代前にはありえなかった新しい事態なのである。

アンナは新しい女として生きる決意をしたのだった。

## 試練

しかし妊娠に気付いた未婚の娘は不安に襲われる。

「受胎告知」後の寝物語で、ゲオルクは友人ハインリヒ・ベアマンとのオペラ制作計画について話す。王侯を刺殺した若者が「漠然とした判決、死刑よりもっと謎めいた判決 (Ein dunkles Urteil, geheimnisvoller als der Tod) を言い渡され」(S.737)、王侯の許嫁だったプリンセスと共に船に乗せられて、行方定めぬ旅に送り出される (ein träges Schiff unbekanntem Zielen entgegen) という筋を話して聞かせるが、この生殺しのような判決、行先の分からない遅々たる (träges) 船旅はゲオルク/アンナ二人の未来、特にアンナの茫漠とした先行き不安を暗示しているように思えて興味深い。

はたしてしばらく後にアンナは、未婚のまま身ごもってしまった若い女としての不安を口にする。この児を何処で生むことになるのだろうか、その家が何処にあるのかまったく分からない (»Daß das Haus schon steht, wo es[das Kind] zur Welt kommen wird, und wir haben keine Ahnung wo ... daran hab ich denken müssen.«) (S.738)。帰属する場が定まらないことへの不安の表明であるが、身の上弱い立場にあるアンナはここで遠慮がちにだが遠回しに結婚という選択肢を仄めかしているようにも見える。しかしゲオルクはそれに気付かぬ風で (ふりをして) 結婚ということには触れず、「君たちを、君と赤ん坊を決して見捨てたりはしないよ。」(S.738) と宥めるだけ。水面下でのせめぎ合いが興味深い場面である。

他方、恋人の妊娠を打ち明けられたゲオルクの困惑もアンナに劣らず大きい。新しい生命 (我が子) 誕生の見通しと社会的責任とを突きつけられた貴族的エステートというのは、自らの死に直面する場合<sup>22</sup>よりはるかに厄介な立場である。妊娠が二人を隔てるという指摘<sup>23</sup>があるが、むしろこれは彼らにとっての試練を意味する、と言うべきであろう。

身分違いの二人にとって結婚という選択肢はあるのだろうか。

ゲオルクは結婚を全く視野の外に置いているわけではない。かなり本気で結婚を考える場面も何度か出て来る。最初は、旅先のホテルでアンナが生まれてくる子供への愛を語り「いいえ、里子に出したりはしないわ」(S.804) と言ったとき、「他人<sup>ひと</sup>に渡したくないのなら、

<sup>22</sup> ホーフマンスタール『痴人と死(Der Tor und der Tod)』のクラウディオ。

<sup>23</sup> Janz/Laermann: *Arthur Schnitzler; Zur Diagnose des Wiener Bürgertums im Fin de siècle*. Stuttgart 1977, S. 165.

渡さなくてもいいよ」と彼は答え、「結婚するのがいちばん面倒がなくていいのじゃないだろうか (wäre es nicht sogar das bequemste, wenn ich sie heiratete?)」という思いが頭を過ぎるが、「...しかし何か引き止めるものがある、口には出さなかった。(… Aber irgend etwas hielt ihn zurück, es auszusprechen.)」(S.804)それが何かは説明されていないが、直後に読まれるアンナの母親からの手紙に、弟のヨーゼフが反ユダヤ主義的な民族派の新聞社に比較的安い給料で就職したことが報告されているのは暗示的だ。また、ピアノ教師アンナの今後の日程について教え子の親から問い合わせがあったという文面にアンナが身じろぎもせず無言というのも、ゲオルク/アンナそれぞれの思いが凝縮された場面である。

次はお産(死産)の後。アンナがまだ郊外の借家で療養中の時期に彼がたまたまロースナー一家(アンナの実家)のアパートの近くを通りかかった際、自宅に帰って来たアンナが両親や弟と一緒に食卓を囲んでいる光景を思い描き、「あんなみじめな生活(dieses klägliche Leben)」(S.889)に彼女を戻すことをしてはならない、「彼女は自分のものだ、自分と一緒に暮らすのだ(mit ihm zusammen leben, zu dem sie gehörte)」(S.890)と思う場面である。しかし彼の思いはいつもの通り断片的で、脈絡のない内的独白の一コマに過ぎず、たちまち忘れ去られてしまう。むしろここでもロースナー家の小市民的なみずぼらしさ(klänglich, armselig)が強調されていることの方が注目される。

最後はドイツの地方小都市デトモルトの宮廷歌劇場指揮者に就職が決まりかけた時。やはり結婚ということを考えるが、「あんな親たちの義理の息子、ヨーゼフのような男の義理の兄とはな!(Herrn Rosners und Frau Rosners Schwiegersohn, Josefs Schwager!)」しかし家族が何だ、結婚相手はアンナじゃないか。優しく穏やかで賢いアンナ!」(S.934)と思う場面がある。しかしここでも踏み切れない。

彼を引き止める「何か(irgend etwas)」が身分の壁であることは既に述べた。理由はもう一つあって、それは身勝手極まるものだが、これも身分と関係がある。優雅な貴族的独身者としてのアイデンティティーを侵されたくないのだ。生活に何の不自由もない特権的身分のゲオルクはプレイボーイで、身を固めることに抵抗がある。「美男ですらりとした長身、髪はブロンドで男爵、ゲルマン、キリスト教徒」(S.908)、そのうえ作曲家であり、ピアニスト、指揮者でもある、となると、魅力に抵抗できる女は少ない。彼は屈託のない人生をこのまましばらく楽しみたいのである。

既に「受胎告知」直後にゲオルクは「父親になどなりたくない、早々と一人の女に縛り付けられるなどまっぴらだ」(S.738)と考えていた。その後も妻と子の間で夕餉をとる家庭的な情景を思い浮かべて気が重くなるほどの退屈を覚え、そんなのにはまだ早すぎる、自分はそうなるにはまだ若すぎる、自分がこの腕に抱く最後の女にアンナになるなんてあり得ない、そんなのはもっと先の話だ、などと思っていた。(S.840)

しかし彼にも弱みがある。それは音楽家としてディレタント (S.743) としか見なされていないことだ。優雅な貴族の身分で作曲もするという事情のせいでもあるが、ある程度の才能には恵まれているものの地道な努力が足りず、持続性に欠けるためでもある。例のオペラ計画を聞かされた時、アンナはそういう掴みどころのない話からほんとにオペラが仕上がるのかしら。「私が貴方なら一先ず書きかけの五重奏曲<sup>24</sup>の方を完成させるわ」(S.737)と答えている。後に彼女が教会で「貴方が立派な芸術家になってくれますようにって神様にお祈りしようと思うの」(S.950f)と言って、ゲオルクを恥じ入らせるのと呼応している。兄は「お前って奴はほんとにとてつもない怠け者だよ。」(S.780)と彼を叱りつけるが、兄以外にこんな心配をしてくれる者はアンナしかいない。ゲオルクはこれを鬱陶しく思う(S.950)反面、「優しく賢いアンナ!」(S.934)と言うように、彼女の市民的堅実さが貴族的遊惰<sup>さが</sup>の性から彼を生まれ変わらせる新生への契機になり得ることをうすうす感じてはいる。ゲオルクは迷いを断ち、身分の壁を超えてアンナとの結婚に踏み切れるだろうか。

### 死児の墓に「真紅の薔薇」を

結局「望まない妊娠」は「おめでた」に変わることなく、死産によって幕を閉じる。臍の緒が巻き付いたのが原因で、1~2パーセントの確率で起きる事例(S.875)、というのが医学的な説明である。だが、文学的脈絡で見るとどうなるか。

小説のほとんど終わり近くでゲオルクは親しい友人に「あの子が死んで生まれたのは、生まれてほしいと願う気持ちが自分に足りなかったせいだ、愛が薄すぎたからだ、そんなことってあり得ないことだろうか」と言い、少し後では訂正して、「生まれてくる子供のことなどほとんど忘れていたというのが本当だ。(中略) もちろん間もなく子供が生まれることは知っていた、でもそんなこと僕にはどうだってよかったんだ。そんなことは忘れ果てて気まま勝手に生きた(hingelebt)のさ。(中略) 特にあの夏の湖畔(の情事[引用者注])では、子供が生まれて来るなどということはすっかり頭から消え去っていた。」(S.956)

ここに語られているのは、ウィーン近郊の借家に臨月のアンナを残してゲオルク一人で旅に出た際に旅先で知り合った人妻との情事のことである。「彼女がほんの一言云えば、何もかも、友人も恋人も生まれて来るはずの赤ん坊も捨てて二人一緒に遠くへ旅立っていたかもしれない。(中略) 今だってもし呼ばれれば行くのでは? そうする方が正しいのではないか。自分には、静かな責任ある生活なんか選ぶよりも、こういうアバンチュールの方が似つかわしいのではないだろうか。」[傍点引用者](S.860f)と、その人妻との切ない別れの後、アンナの許に帰る列車の中で彼は述懐している。

---

<sup>24</sup> 五重奏曲は話ばかりで、いつまで経っても完成しないために「神話的」と冷やかされる。(S.913)

嬰兒の死は彼の思いが天に届いた結果と言える。死産によって彼は社会的責任を免れ、束縛から解放された。「もし赤ん坊が死んでいなければ君は近いうちに、ひょっとしたら今日にでも結婚していたかもしれないね」(S.933)と友人は語るが、むしろ逆であろう。結婚を決断できず、生まれてきたら里子に出すなどと言われては子供としても堪らず、この世に留まる気をなくした (das dazu bestimmt war, als unser Kind bei fremden Leuten zu leben und das nicht auf Erden hat bleiben wollen.) (S.917) というのが真実ではあるまいか。

「優しく賢いアンナ」と家庭を築き、彼女の支えによって貴族的な遊惰<sup>さが</sup>の性を克服できるのではないかというぼんやりした期待と、家庭的団欒の輪に取り込まれることを厭い、孤独で非情な貴族的エステートであり続けることにこだわる、その両者の間で揺れ続けたゲオルク。結婚する相手はアンナだ、家族は関係ないと、幾ら理屈では分かっている、優雅や洗練からはほど遠い両親や、粗野な反ユダヤ主義者の弟と縁続きになることへの抵抗感は消えなかった。身分の枠を超えて結婚へと踏み切ることがゲオルクにはついに出来なかった。

赤ん坊の首に絡みついた臍の緒は、纏れに纏れたゲオルクの迷いの象徴である。この臍の緒は新生児のみならずゲオルク自身の新生への淡い期待の息の根をも止めたのである。嬰兒の死はゲオルクに下された天罰という側面もある。

死産の後もおゲオルクはこれまで通りの関係が続けるつもりで、アンナを口説く。だが、散歩に誘ってもオペラに招待してもアンナは頑として応じない。彼が就職先となるデトモルト宮廷歌劇場から詳しい手紙を書き送ったのではないかと言うと、彼女は「いろいろ詳しく書いてはあったけど、あれでは何も書いてないのと同じじゃないの (Was steht denn schon in Briefen, wenn sie noch so ausführlich sind!)」(S.916)と「非常に厳しい口調で (ganz hart)」言い返す。

ゲオルクの手紙に書かれていなかった肝心のことがheiratenの一語なのは明らかである。新しい女たらんとしたアンナも心身の苦しみを経て伝統的な結婚制度の安定した価値を認めざるを得ない。結婚という旧来の制度に頼る以外シングルマザーを支える社会的基盤はまだ整っていない時代である。もし未婚のまま妊娠出産したことが知れわたれば、ピアノ教師としての地位も危うい。イタリア旅行も郊外の家もそのために必要だったのである。

「どんなに大胆で誇り高い娘さんでもこういう場合に結婚指輪を嬉しく思わない者なんていませんよ。貴方の恋人がそんなことをおくびにも出さず、とても辛かったはずのこの九カ月の果ての苦い幻滅<sup>にが</sup>(死産[引用者注])を我慢して受け入れたというのは、賢く気高い彼女の人格<sup>しょう</sup>を証して余りあるものですよ。」(S.933)と友人は語るが、しかしアンナとて石仏<sup>せきぶつ</sup>ではないのだ。

「この人なら身を任せてもいい、自分を待ち受ける喜びも悲しみもすべて自分で引き受けるのだ」と心に誓って、旧い道徳からの解放を宣言したアンナだったが、妊娠した段階で早

くも将来への不安を口にし、心細い「九カ月」の果ての二晩と三日にわたる激しい陣痛と死産を体験して心が折れた。<sup>25</sup> 新しい女として生きようとした彼女の挑戦は挫折に終わった。

「死産の後彼女のベッドの脇に彼が座り、彼女が黙って横たわっていた時、(中略)既にあの時彼女は彼よりも早く、すべてが終わったことを知っていたのだ」(S.949)とゲオルクが気付くのはようやく小説の終わり近くになってからである。死んだ児の新しい墓に手向けられた「真紅の薔薇 (dunkelrote Rosen)」(S.955)によって物語は終わる。それは先日ゲオルクがアンナの許に愛の言葉を添えて届けさせた薔薇 (wundervolle dunkelrote Rosen) (S.927)であった。死児の墓は、敗北に終わった二人の挑戦の記念碑でもある。

従来の研究は「(望まない)妊娠」というファクターにあまり注意を払わず、主人公ゲオルク/アンナの試練と挫折という側面を軽く見過ぎてきたきらいがある。

ゲオルク中心に見るなら、この小説は父の死によって始まり、子供の死によって幕を閉じる。父親を亡くした男が自らは父親に成りえなかった物語である。これはゲオルクの弱さから来るものだが、この破綻の原因となった彼の弱さには、世紀末ウィーンの社会がまだ旧い身分制秩序や「名誉」の不文律から解放されず、若い人々の意識や行動もその支配を脱し切れていなかった事情が反映している。「自由への道」を歩み出すには、第一次大戦後の帝政終焉と身分制秩序の崩壊を待たねばならない。

### **Die ungewollte Schwangerschaft in *Der Weg ins Freie***

Tomotaka TAKEDA

Schnitzlers Roman *Der Weg ins Freie* behandelt eine ungewollte Schwangerschaft – ungewollt wenigstens aus der Sicht der männlichen Hauptfigur Georg. Auf die Frage seines Bruders, ob er seine Beziehungen nicht zu legitimieren denkt, erwidert er: „Vorläufig nein“. Er fügt aber zugleich hinzu, dass er nicht so unaufrichtig sei, Anna im Stich zu lassen. Er erläutert Annas Mutter die Umstände und den Plan für die folgenden Monate: Um nicht Aufmerksamkeit zu erregen, reise Anna mit ihm nach Italien ab, wo kein Mensch sie kenne. Dann solle in der Umgebung von Wien ein Landhaus zur Niederkunft gemietet werden, und das Kind wohl in der Nähe der Stadt in Pflege gegeben werden... „Nicht so sehr das, was sie (Annas Mutter) erfahren hatte, drückte auf sie, als vielmehr die Vorstellung, dass sie es so wehrlos über sich ergehen lassen

---

<sup>25</sup> この小説における死産は日本の「妊娠小説」における中絶と同じ役割を果たしている。ゲオルクはそれによって社会的責任を免れ、アンナは苦痛と幻滅を味あわされて、その後別れが来る。



musste, eine arme Mutter, in kleinbürgerlichen Verhältnissen, die dem vornehmen Verführer machtlos gegenüber saß.“

Hier merkt man deutlich den Standesunterschied. Georg ist von Adel und Anna ist „a lower-middle-class girl“. Sie ist aber nicht „ein süßes Mädels“. Dem Dr. Stauber aus der Vätergeneration habe es „einen leisen Ruck gegeben“, als sie, ein anständiges Mädchen „aus guter Familie“, ihm „die Sache erzählt hat“. Anna aber hat sich dem geliebten Georg hingegeben „mit dem festen Entschluss, alle Seligkeit und alles Leid hinzunehmen, das ihr bevorstehen mochte.“ Gemessen an den Verhältnissen zu Anfang des 20. Jahrhunderts war sie eine neue Frau. Aber als sie ledig schwanger wird, fühlt sie sich unruhig, dass sie keine Ahnung hat, wo das Haus steht, in dem das Kind zur Welt kommen wird: eine Identitätsunsicherheit.

Georg schwankt, ob er sie heiraten soll? Als Anna die Freude auf das Kind nicht verbergen kann und sagt, dass sie es nicht zu fremden Leuten geben möchte, fährt es ihm durch den Sinn: „--- wär es nicht sogar das bequemste, wenn ich sie heiratete? ... Aber irgend etwas hielt ihn zurück, es auszusprechen.“

Was ist das „irgend etwas“? Ihm gefällt es nicht besonders, dass er sich mit ihren Eltern und ihrem Bruder verschwägern würde, obwohl es doch „gütige, sanfte, kluge“ Anna ist, die seine Frau sein würde. Außerdem gibt es auch einen egozentrischen Grund des müßigen schönen Barons. Es ist ihm nämlich unerträglich, in so jungen Jahren solche ernsten Verpflichtungen einzugehen wie Vater zu werden und sich so früh schon für alle Zeit fest an ein weibliches Wesen zu binden.

Andererseits fühlt er dunkel, dass es nötig ist, auf eine arbeitsscheue Adelslebensart zu verzichten. Als Komponist wird er an dem Dilettantentum kritisiert. Außer seinem Bruder, der ihn aber auch „verflucht faul“ beschimpft, bekümmert sich um ihn nur Anna, die zu Gott darum betet, dass aus ihm „was sehr Bedeutendes, ein wirklicher, ein großer Künstler“ wird, indem er noch fleißiger, noch konzentrierter arbeitet. In der Vermählung mit ihr sieht er eine Möglichkeit zum neuen Leben. Seine halb bewusste Hoffnung ist gescheitert jedoch, als das Kind tot geboren wird. Der verworrene Nabelstrang, der den Jungen erwürgt hat, ist auch ein Symbol für Georgs ewige Wirrungen und Unentschlossenheiten, die seine eigene neue Geburt vereitelt haben.